

# 中学校教師特有のビリーフに関する研究

○大澤 洋子  
(埼玉県川口市立南中学校)

宮下 敏恵  
(上越教育大学)

## 問 題

文部科学省(2006)の統計によれば、精神性疾患により病気休職をした全国の公立学校教職員の休職者数は、過去最多を更新している。そこで精神性疾患への予防的な取組や対処法が必要である。教師のストレス対処のため、自分で気づいたり、変容させられるビリーフが挙げられる。しかし教師のビリーフの先行研究は調査対象者や尺度の校種が統一されておらず、一貫した結果が得られていないため、校種を限定して検討する必要がある。

## 目 的

予備調査で中学校教師特有のビリーフ尺度を作成する。本調査では作成されたビリーフ尺度を用いて教職経験年数ごとのビリーフの実態を明らかにする。

## 予備調査

河村・國分(1996)、土井・橋口(2000)のビリーフ尺度と現職中学校教師への半構造化面接を基に検討し、中学校教師特有のビリーフ6領域45質問項目を作成した。中学校教師200名に対し5件法で回答を求め、182名からの有効回答を得た。調査対象者の内訳は男性116名、女性66名、平均年齢は40.8歳( $SD=8.71$ ,  $range=22$ 歳-59歳)、平均教職経験年数は17.9年( $SD=8.80$ ,  $range=1$ 年未満-37年)であった。最尤法による因子分析(Promax回転)の結果、「教師が理想とする生徒像」「教師としての適性感」「他者不信感」の3因子が抽出された。

## 本調査

### 方法

作成されたビリーフ尺度、GHQ30を用いて中学校教師250名を対象に回答を求め、200名から有効回答が得られた。調査対象者の内訳は、男性114名、女性86名、平均年齢は42.6歳( $SD=9.51$ ,  $range=21$ 歳-59歳)、平均教職経験年数は19.7年( $SD=9.69$ ,  $range=1$ 年未満-39年)管理職22名、教諭167名、養護教諭11名であった。

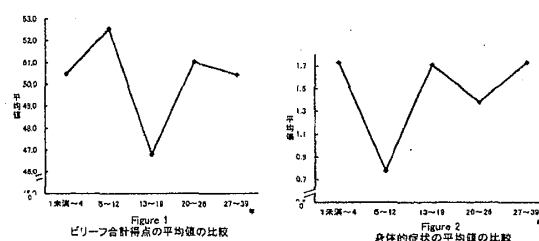
### 結果

「中学校教師特有のビリーフ」「GHQ30」について教職経験年数との関係を検討するため、教職経験年数1年未満-4年、5年-12年、13年-19年、20年-26年、27年-39年の5群に区分し各群の平均値を1要因分散分析で比較した。その結果「ビリーフ合計得点」において有意な群間差が認められたため、LSD法による多重比較を行ったところ5年-12年、20年-26年、27年-39年の

教師の「ビリーフ合計得点」は、13年-19年の教師と比較し有意に高かった( $F(4, 195)=2.50$ ,  $p<.05$ )。また5年-12年、20年-26年、27年-39年の教師の「他者不信感」の得点は1年未満-4年の教師と比較して有意に高かった( $F(4, 195)=2.77$ ,  $p<.05$ )。また、27年-39年の教師の「他者不信感」の得点は13年-19年の教師と比較して有意に高かった( $F(4, 195)=2.77$ ,  $p<.05$ )。つまり5年-12年の教師は最もビリーフが強く、13年-19年で弱まるが、再度20年以降に強まり、中学校教師のビリーフの強さはほぼM型で変化した(Figure 1)。

「GHQ30」の6因子について教職経験年数との関係を検討するため、1要因分散分析で比較した。「身体的症状」の平均値において群間差に有意傾向がみられたため、LSD法による多重比較を行ったところ、1年未満-4年、13年-19年、27年-39年の群の得点は、5年-12年の群と比較し有意に高かった( $F(4, 18)=2.04$ ,  $p<.10$ )。

GHQ30でみた精神的健康については、教職経験年数5年-12年の教師のGHQ得点が最も低くカットオフポイント以下で精神的健康は保たれていること、13年-19年の教師のGHQ得点が上昇し、精神的健康が損なわれる傾向にあるが、20年-26年になると一度GHQ得点は下がり精神的健康の状態は改善され、その後27年以降の教師はすべての教師の中で一番GHQ得点が高く、精神的健康が損なわれている傾向が示された。精神的健康はビリーフと相対するような形となって表れ、ほぼW型となった(Figure 2)。強いビリーフにより精神的健康が損なわれる結果の先行研究に対し、本研究では強いビリーフは精神的健康を損なっていないことが明らかになった。



### 考察

今後の課題として、ビリーフについて取り組みやすく、効果的にビリーフを和らげたり、修正できるようなプログラムの考案が望まれる。